



---

特集：温泉と災害

---

「温泉と災害」の特集にあたって

佐々木 信 行<sup>1)</sup>

Disaster in Hot Spring Area  
—Introduction—

Nobuyuki SASAKI<sup>1)</sup>

2011年3月に起きた東北地方太平洋沖を震源とするM9.0、最大震度7の巨大地震は巨大津波を発生させ未曾有の災害をもたらした。その後、同年夏には大豪雨が西日本を襲い、またまた大きな被害をもたらした。また、2014年8月には、広島市内で豪雨による大規模な土砂崩れが発生し、多くの犠牲者が出るという大災害となった。さらに、同年9月には長野県と岐阜県の県境の御嶽山が噴火し、登山客58名が死亡するという戦後最悪の火山災害が起きている。そして、その2年後の2016年の4月には九州熊本地方を震源とするM7.3、最大深度7の巨大地震が発生し熊本、大分両県を中心に甚大な被害をもたらした。その後、同年10月には鳥取県中部でM6.6、震度6弱の大きな地震が発生している。まさに日本列島は今や地震列島、火山列島、災害列島の様相を呈している。

そのような日本列島には現在(平成27年度)3084の温泉地、およそ27700箇所の源泉が存在し、火山の恩恵も受けながら、年間延べ1億3206万人が温泉を利用している世界一の温泉大国である。このような自然の恵みである温泉が火山活動や地震等の自然災害の影響を受けるのもまた致し方ないことであるが、台風や豪雨による風水害なども多いわが国は、付随して多くの災害が発生しやすく、家屋や農作物にも多大の被害をもたらされることが多い。

今回、この特集で執筆していただいたのは、昨年の平成28年度熊本地震の被害状況とアンケートの実施による温泉への影響調査に関する報告、ならびに温泉ガスや温泉の細菌、そして温泉の放射能や成分の毒性に関するものである。前者は実際に熊本地震に遭われた現地からの報告であり、アンケートをもとにした調査をもとに、当該地域に与えた地震の影響について詳しい報告がなされている。熊本地震が周辺の温泉に与えた影響についての貴重な資料である。著者は京都大学地球熱学研究所名誉教授の由佐先生である。また、後者は温泉の毒性について書かれたものであり、温泉ガスや温泉に生息する細菌による事故や温泉水中のメチル水銀など有毒な有機金属、そして温泉水中の放射性元素による放射能の人体に及ぼす影響についても紹介されたものであり、著者はコロラド州立大学名誉教授のAnthony T. Tu(杜祖健)先生である。Tu先生は1994-1995年にわが国で起こったオウム真理教の一連の事件において、毒物がサリンであることを突き止め、事件を解決に

---

<sup>1)</sup>香川大学 <sup>1)</sup>Kagawa University

導いたことで有名な先生である。

温泉の毒性や災害について考えることは、あまり楽しいことではないが、温泉地を訪問するに際し、このような災害についての知識や心構えのようなものをもっておくことは、これからも続くであろう災害の時代において大切なことであり、必要なことであろう。温泉を楽しむとともに、このような災害に常に対応できるよう備えておきたい。なお、この特集は2回連続で行う予定である。